

## 教師を育てた 言葉たち

No.001

静岡県・私立沼津中央高校  
**後藤松太郎**先生  
ごとう・まつたろう

◎教職歴17年。同校に赴任して18年目。  
進学指導課長。地理歴史・公民科。

静岡県・私立沼津中央高校 全日制／普通科／共学／1学年約240人／2016年度入試合格実績（現役のみ）：4年制大は、獨協大、國學院大、法政大などに延べ51人が合格。



**幼** い頃から、刑事に憧れていた私は、20代の頃は正義感あふれる熱血教師で、生徒に何か気になることがあれば、些細なことでもすぐに注意をしていました。問題が起きる前に注意するのが教師の役目であり、教師が厳しいほど生徒は真っすぐに育つと信じていました。

しかし現実には、私が注意するほど背を向ける生徒もいました。刑事ドラマでは「カツ丼でも食うか？」と語りかけ、相手の心の中にずっと入っていくシーンがよく描かれます。でも、当時の私は、すぐに「こら！」と大きな声でとがめていました。それに対して反発する生徒も当然いて、收拾がつかなくなり、周りの先生に取りなしてもらったこともあります。

高校時代は、いわゆる手のかからない生徒で、特に先生に怒られた経験がなかった私は、生徒をどう指導すればよいか分かっていなかったのでしょう。だから、先輩の先生方に助けてもらおうと、必要以上に大きな声を出していたのかもしれません。

**教** 師になって4年目、大ベテランの先輩先生から、「後藤くん、ちょっと」と声をかけられました。先輩は私に、「最近どう？」とお茶を差し出してくれ、雑談が始まりました。取り留めのない話をしていたはずですが、いつの間にか生徒への接し方が話題になり、先輩から「**ピンポイントで解決しようとしてもダメ**」という言葉がかけられました。いろいろな話をする中で、生徒は徐々に心の中を見せてくれる。何気ない会話の中での生徒のシグナルを見逃してはいけないと先輩は話してくれました。

「このままの指導スタイルではいけない」と内心思っていた私は、先輩の言葉を受け入れることができました。しかし、理解はできても、すぐに自分を変えることはできませんでした。そんな私に、その後も先輩は「最近どう？」と時々言葉をかけてくれ、話を聞いてくれました。先輩と話す中で、私は心がほぐれていくのを感じると同時に、「耳を傾ける」ことの大切さを学びました。

自分の変化を実感するようになったのは、それから3年ほど経ってからです。指導が必要な生徒に、いきなり問題の原因を聞くのではなく、生徒がうまく表現できない思いに耳を傾け、折り合いのつかないモヤモヤを抱えていることが分かった時は、「大変な中で一生懸命頑張っているんだね」と言葉をかけられるようになりました。そして、生徒が前向きに挑戦している時、小さくても成果を出した時などは、さらに背中を押すように逆にピンポイントで褒めるようになりました。教育という営みを、私が少し俯瞰できるようになったからだと思います。

**今** 私たちが向き合っている生徒たちは、先を見通すことが難しい社会を生きていかなければなりません。だからこそ、生徒には学び続ける力が必要であり、私たち教師には、生徒との日々の対話の中から生徒自身も気づいていない可能性を引き出し、生徒にチャレンジを提案する力が求められていると思います。教師にとって「生徒」は、答えが1つではない問いです。問いに向き合うために、私たちも学び続けなければならないと思っています。